

校長室だより

令和8年 7月3日(金)
第 14 号
十日町市立中条中学校校長室

テストの後、保護者は？

当校では、昨日7月2日(木)に1学期の定期テストが終わりました。今日は欠席をした生徒のテスト予備日に設定しているため、テストの返却は週明けの7月6日(月)からになります。テストがあれば当然結果が気になります。生徒も保護者の皆さまも私たち教職員でも点数が気になるのは当然です。しかし、このテストの返却の場面こそが、生徒の学習に対するモチベーションを大きく左右することは、意識しておきたいものです。



皆さま、点数だけに一喜一憂してはいないでしょうか。もちろん点数は一つに大きな指標です。しかし、テストの目的は、何が身に付いていて、教師側としては何を重点的に指導したらいいか、生徒側でも自分の弱点をつかみ、学習方法を改善することが大切なのです。校長室だより4号の「ゴールをイメージする」にも通じます。

前回の校長室だより第13号では、非認知能力を育てるほめ方として「結果でなく努力をほめる」ことの効果について紹介しました。「努力をほめる」ためには、子ども(生徒)の様子をよく観察していないとできません。保護者の立場としては、子どもを見ていたいと思うけど、「忙しくて見ていられない」とか「中学生だから、勉強は本人に任せている」とおっしゃる方もおられると思います。そういった方ほど、テストの点数が悪かった時に、叱ったり、プレッシャーをかけたりしてはいないでしょうか。(そこが少し心配です)

小学校での国語教育を研究されている岸圭介先生の「学力は『ごめんなさい』にあらわれる」(ちくまプリマー新書)という本から少し引用し、考えてみたいと思います。

テスト後にご家庭でこんな会話はありますか。漢字テストで70点をとったAくん。友達のBくんは90点でした。(問題数10問、1問10点と考えてください。)

母「漢字テスト返ってきているよね。70点？3問も間違っているの」「Bくんはどうだったの。ほかの人は」「勉強したって言ったじゃない。なんで3問も間違えるの」「とにかく練習しなさい」

こう言われたAくん。学習意欲は高まるでしょうか。Aくんは、お母さんの言葉にすっかり自信をなくしてしまうのではないかと思います。

この場合、Aくんの3問の間違いは、「休む」を「体む」、「先生」を「生先」、「百」を「百」のように中の横棒をもう一本書いて二本の横棒にしたという間違いでした。一方、Bくんは、1問「空」が書けず、空欄のままでした。確かに90点と70点では理解度に違いがあるかもしれませんが、Aくんの間違い方は悪くありません。次につながる可能性が大きいからです。Bくんは90点ですが、1問は全く書いていません。点数は良くても覚え方としてはどうだったか、考える必要がありそうです。



テストでの空欄や未記入はできるだけさせたくないと思います。自分の頭の中を巡らせて、何かしら答えさせたいのです。授業の中でも「分かりません」というのは簡単です。「分かりません」と言う時は、多くの場合そこで思考が止まり、あきらめてしまいます。分からなくても考えて答えを出す。そこで、自分の学習したことを振り返ることが大切なのです。Bくんもその1問思いつくものを書いてみる必要があります。(校長より)

生徒にとってダメージが大きいのは「この点数じゃダメでしょ。もっと勉強なさい」と怒られて終わってしまう場合です。生徒は次にどうしたらいいか分からないのです。このように次へ向かうヒントもなく、怒られることを繰り返していれば、学習意欲が下がるのは当然です。Aくんは内心こう思っているかもしれません。「次は必ず書けるはずなんだけど…。」岸先生はこの場面を分析しています。

学習の到達度からいうと、Aくんは確かに3問、間違えています。しかし、間違え方は悪くないのです。「休む」や「百」は横棒を余計につけてしまいました。小さな子どもですから、似たような字は混同して覚えてしまっていることもあります。場合によっては、はじめから字を間違えて覚えていたかもしれません。「休」と書いたつもりが、いきおい余って思わず「体」と書いてしまった可能性さえあります。「先生」も両方の漢字はできています。無意識に書いてしまったかもしれません。その結果で単純に「漢字学習をおろそかにしていた」と決めつけることは難しいのです。

Aくんの事例の場合、実態をつかんでいないのは、どう考えてもお母さんですよ。子どもはただでさえ、くらべられるのをいやがるものです。ましてや、点数以外の面に正しく目を向ければ、努力を重ねていたのはAくんかもしれないのですから。Aくんは決して書けないわけではなかったのです。

でもお母さんは実態を見ることなく、感じたままに話をしたのが原因で、お母さんとAくんとの間の心理的な距離も生まれてしまっています。こうして教育熱心な親が子どもの学習意欲をうばうという構図が完成するのです。

私は「なるほど」と思いました。私たち教職員も個々の生徒の間違いを把握しながら、個々の生徒にどうアドバイスするかを考えることが大切だと改めて思います。

岸先生は、保護者の適切な声掛けの例を挙げています。

「70点だったのかあ、惜しかったね。間違いには必ず原因があるよ。こういうときは、どうして間違えたのか振り返ることが大切だよ。少し考えてみて分かったら教えてくれる？」

「漢字は分かっていたのに、間違えてしまうのはもったいないね。覚えていてもうっかり間違えてしまうことはあるよね。じゃあ、これからどうやって見直しをすればいいかな。」

このように言うと子どもはどう感じるでしょうか。保護者としては悪い点数を見るとつい興奮してしまい、なかなかこうは言えないかもしれません。そこをグッと堪えて、間違いに寄り添って見たら、そこで生徒のモチベーションが高まるのではないかと思います。校長室日より第13号で紹介した魔法の言葉「惜しい（おいしい）」がこの会話に入っていますよね。

これは、小学校低学年の事例なので、保護者の中には「中学生の学習内容を見てあげることはできない。私には無理だ。間違いを一緒に考えられない。」と言われる方もいらっしゃるかもしれません。私としては、正しい答えを導けなくても少しの時間一緒に向き合うことでいいのではないかと考えます。子どもの思考過程、つまりどう考えてその間違いを導いてしまったのかを少しでも見つめるだけでいいと思います。生徒が家庭でその振り返りをした上で登校し、学校で教師や友達に聞けば必ず良い方向に行くはずですよ。



学校では、生徒は本当に先生方の様子をよく見えています。時々感心してしまいます。同様に家庭では保護者の皆さまの様子をよく見ているはずです。保護者が点数だけにこだわるのではなく、一緒に考える姿勢を持てば、自然と子どもの学習意欲は一層高まると感じます。